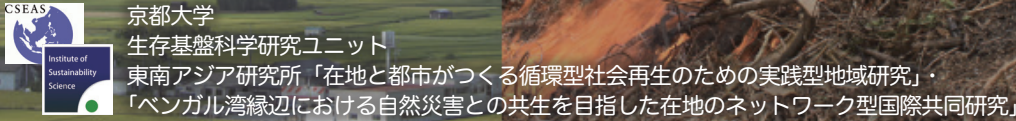


まちやむら、そこに住む人びと（＝ざいち）の、知恵や生き方（＝ち）から学び、実践する活動です。



## 朽木フィールドステーション

### 「下切による採種法」 一ひとつの在地の知を受け継ぐーその3

朽木 FS 黒田末寿

#### 下切は福井や秋田にもある

これまで2回にわたり、滋賀県余呉地域に山カブラの種取り法として伝わる「下切」について考察してきた。その効果として、偶然にも二週間ほど陰干した下切個体を植えると開花期が顕著に早まったことから、下切で他の菜の花と開花期をずらして形質を維持した可能性があること、さらには、下切によって形態のみならず味や堅さ、中身の色まで種取用株の選別項目になることが重要であると結論した。

その後、山形大学の江頭宏昌さんに山形に下切法があるかどうか、カブの採種は種が未熟のうちにおこなうのかどうかを問い合わせたところ、次の返事をもらった。

- 1) 下切法は山形にはないが、福井や秋田でも行われていると聞いている。
- 2) 『福井の伝統野菜』（122 - 123 頁）では、『百姓伝記』にその記述があると述べ、それについて、栄養生長を押さえ生殖生長を促し開花期を早める、その結果、交雑しにくくなり純系を保ちやすくなるのではないかという推測がある。
- 3) 山形での採種時期について：サヤにわずかに緑色が残っているうちに刈り取る。これは、全部茶色になって刈るとさやがはじけて種がこぼれるからである。種の色は明るい茶色が少し混じるが、基本的に黒で、地元でも茶色より黒色の方が良い種だと認識されている。
- 4) 山形での交雑防止について：交雑防止には、温海カブの産地一霞に限らず、基本的には一つの地域に1種類のカブしか植えない。近くに他の *Brassica rapa* 種の野菜（ハクサイ、チンゲンサイ、ミズナ、タイサイ、コマツナなど）が花を咲かせるようなところでは、屋外で寄せ植えしてネットを掛けるか、ネットで遮断したハウスで採種用の親株を栽培し、訪花昆虫の侵入を防ぐ。この場合、受精率が極端に落ちて種ができない（自家不和合性）ので、人工的にハケなどで個体間の授粉を行うか、ハウス内にミツバチかマルハナバチを放す。

#### 『百姓伝記』にある下切法

『福井の伝統野菜』はインターネットでもヒットしないので、「福井焼畑の会」に問い合わせることにして、ちゃんと読まずに

下切の記述がないと思い込んでいたことを悔やみつつ、『百姓伝記』を調べた。これは成立年代・著者ともに不明だが、江戸時代に数多く出た農書のうちでもっとも古いものとされ、岡光夫氏（文献解題：1979）は、天和年間（1681 - 83）に書かれたと推定している。施肥法の詳細、作物の作り方・土壌の良し悪し、調理法、農具の作り方、治山・治水法など、今でも学ぶことが多い内容を備えている。その12巻の「かぶらを蒔事」では、カブが元の品種特性を失いやすい野菜であることに注意を喚起し、採種法（文献246 - 247頁）を次のように記している（黒田による現代語訳）。

「一、カブラの種は、植え付けたままの株から採らないこと。そういう株の種は少ししか取れないうえに、植えると秋に早くスが入ってしまう。採種用には、葉を取り、細根をよく取って、玉のかなりの部分を切り捨てて（原文：よほどかぶをきりすて）植え替えて施肥すること。生ゴミ等をかぶせて雪や霜が直接当たらないようにする。そうすれば、2月（旧暦、以下同様）の末に花が咲くので、トウの先を順に摘心して実を充実させる。小枝のトウまで実が入ったら、刈り取って2、3日水に浸してから干す。乾けばもんで種を取る。寒地では4月末から5月にかけて実が出来る。暖地では4月中旬に（さやが）みな色づく。

採種用のカブラは、形、葉、根をよく吟味して、元の特長を失わないようにする。また、トウの本枝の種を蒔けば早く大きくなり、脇枝の種のカブラは大きく育たない。試してみるとよい。」



採種用に下切して植え替えた山カブラ。施肥してある。『百姓伝記』によれば、脇枝の種子は取らず、主枝の花穂も先端部は摘心して種子を充実させる。

文献 『百姓伝記』（著者・年代不明、岡光夫翻刻・訳・解題）、『日本農書全集』第16・17巻、農山漁村文化協会、1979。

## 亀岡の農業と自然 (8) 一春 恋の季節一

京都学園大学バイオ環境学部 大西信弘

### 水田で繁殖するケリ

亀岡で田植えが始まるのは、5月の連休頃から。それまでは、一部では田起こしが始まりますが、まだ水を入れていない状態です。亀岡の水田では、あちこちでケリ(写真1)を見ることができます。大きさもハトぐらいなので、知らないとハトみたいな鳥に見えるかもしれません。まだ湛水前の水田を気をつけて見ていると、4月下旬頃から、ケリのヒナ(写真2)を見ることができます。卵から孵ったヒナ達はすぐに歩くことができ、エサも親からもらわずに自分で田んぼを歩いて探します。それでも小さいうちは、親の羽の中などで暖をとることもしばしばのようです。5月中下旬くらいまでは、まだ水の入っていない水田などをうろろうしながら育ち(写真3)、その後、飛べるようになるようです。

ある程度、ヒナが大きくなると、どこにヒナがいるのかはすぐに分かります。親がヒナを守るために周囲を警戒していれば、そこにヒナがいるのです。威嚇をするときには、ペアで近寄る人やトビに対して威嚇行動(写真4)することしばしばです。遠くでケリが警戒声を出しているなと思って振り向くと、農家の人の上空でケリが大騒ぎしているようなことも珍しくはありません。営巣場所が見つかってしまうと巣を放棄する鳥もいますが、ケリではそういうことにはならないのかもしれません。

威嚇しているときには、周囲に自分たちがヒナを守っていることを知らせてしまうかのような行動ですが、普段は、ヒナを襲う

危険のあるトビなどに、居場所を悟られないようにしています。ケリは、ペアでヒナを守っているのですが、ヒナの保護とエサ取りと交互に役割交代しながらヒナを守り続けます。周囲に外敵がいない状況で、ヒナの保護を交代するときには、保護している個体から少し離れたところに着地して、こそこそと保護している個体に近づきます(写真5)。すると、保護していた個体は、ヒナ達から離れたところまで、さささと移動して飛び立っていきます。

動物が他の個体に襲われるのは、不意をつかれたときであって、警戒している状態では襲われにくいようです。鳥や魚で、自分たちを食べてしまうような捕食者に対して、その捕食者のそばに集まってきて大騒ぎをしたり、みんなで取り囲んだり、攻撃したりするモビングという行動が知られています。このとき、嫌がらせをしている個体達は捕食者の近くにまで接近するのですが、それで襲われることはなく、捕食者の方がしぶしぶその場から離れていきます。こうして、捕食者を見つけたら、そこにいるのは知っているからあっちに行け! というような行動をして、捕食者も見つかっているなら襲うのも難しいと、あきらめるのでしょう。

ケリも、集団にはなりませんが、普段はできるだけ、他の個体に見つからないように行動し、他の個体が至近距離に近づいたのを見つけたら追い払うということをして、ヒナを守っているのでしょう。ただ、それでも、全てのヒナが親になれるのではなく、日が経つと連れているヒナの数が減っていつてしまいます。これも自然の出来事ではあるのですが、少しでも多くのヒナが無事に育って欲しいと思ってしまいますね。



写真

- 1: 亀岡の水田のケリ (2008.7.6 撮影)
- 2: 水田をうろつくヒナを最初に見つけたのは2008年でした (2013.4.26 撮影)
- 3: すっかり大きくなったヒナ (2008.5.16 撮影)
- 4: 私の上空で威嚇中のケリ (2008.5.5 撮影)
- 5: 普段は姿勢よく立っているケリがこそこそと歩いている様子 (2008.5.16 撮影)

## 在所を語る A さん：「体に植えてある根気の木が枯れかけたら何糞という肥料をやる」

守山 FS 藤井美穂

滋賀県守山市洲本町開発（かいほつ）集落で聞き書きの協力をしていただいている A さんが同市の速野学区の社会福祉協議会からインタビューをされたことを紹介したい<sup>1</sup>。

### 1. A さんは、いつの生まれで、現在何歳でいらっしゃいますか。

大正 15 年 9 月 18 日生まれで 87 歳、数えの 88 歳の寅年です。

### 2. 小さい頃の思い出や今でも印象に残っていることがおありですか。

昭和 28 年 9 月 25 日の夜、暴れ川である野洲川の開発地域における堤防が決壊しました。当時、私は開発の消防団員だったため、その夜から 4 日間は家に帰らず、旧公民館に宿泊して他村からの応援団と一緒に堤防を復旧しました。

9 月 15 日の夜、己爾乃神社の境内で行われる菜蒔盆<sup>2</sup>では、灯明を灯し、盆踊りが行われます。この年の菜蒔盆は雨のために灯明を灯さなかったため、堤防が決壊したと言われるようになりました。それからは、菜蒔盆には必ず灯明を灯していただきます。

墓地の木が大きくなりすぎて、昼間でも薄暗く、娘さんや若嫁さんなんか一人で墓地へ参拝するのが怖くいらしたので、野洲市の会社からサルベージュ（切った木を吊るクレーン）を 1 日 1 台、お願いして借りて、木立を切りました。午後から各戸に一人が出向いて切断された木を野洲川の堤防の下で処分しました。今、墓地には 1 本の木も残っておりません。

また、戦争中に私は海軍志願を小学校の先生に勧められて、海軍に入隊して丸 3 年間軍隊生活をしました。最初の 1 年間は舞鶴海兵団と横須賀の普通科砲術学校でしたが、その後丸々 2 年間は第一戦でした。太平洋の島々では多くの方々が戦死されました。ジャワ、スマトラ、ニューギニア、ボルネオ、セブ、ルソン、ミンダナオ、マーシャル群島等の太平洋の島々は全部といっていいほどまわってきました。マニラの宮殿にもよくいきました。

### 3. 開発は、学区の一番東に位置している地域ですが、A さんから見ると「開発」とはどんな地域だと思いますか。また、「開発」の伝統的な行事もおきかせください。

日本一の幸福な村、幸せな集落ではなかろうかと思っています。終戦後、開発には氏神の神社はありますが、立派な神輿が無いので、祭りになると、大人も子供も寝祭り<sup>3</sup>でしたが、ある方が立派な子供神輿を寄付してくれました。また、その後、花神輿、天狗のお面も寄付してもらいました。神社の祭りの時に、本殿の左側と右側に飾る 1 対の真神（まさかき）など全部いただきました。真神は棒杭の上部に神の枝を縛って長い五色絹をとりつけたものです。向かって右神には鏡と玉、左神には剣がついています。祭りでは、在所の東に設けられた休憩所で、大人はビール、子供には菓子やいろんな飲み物等たくさん出してくれる会社があります。さらに、秋の菜蒔盆の伝統行事では、盆踊

りの際に灯明にマッチで火をつけていましたが、ある方の寄付によって、電気スイッチ一つで千の灯明の灯りがいっぺんに灯るようになりました。風が吹いても消灯しない、少々の雨でも可。非常に大助かりでした。また、この方が一流の芸人さんを 20 年間、毎年約 3 名ずつ開発に招待してくれました。9 月 15 日（昔の敬老の日）、開発の菜蒔盆の日の午後から北公民館にて芸人が演芸を披露してくれました。この日は外へ嫁に行っている娘さん、近所の老人達もたくさん来てくれまして、北公民館の二階が落ちるくらいに人がいっぱいでした。非常に幸福な村、幸せな集落だとつくづく思いました。そして、演芸が終わった夜は千の灯明と盆踊りでした。

### 4. 毎日どのようにお過ごですか。

家にいるといろいろな事が耳にはいりますので、雨降り以外はなるべく畑に行きます。天気は良いし、気持ちも日本晴れで毎日楽しく作業をしております。

### 5. 「みみの里」<sup>4</sup>の方と一緒に畑仕事されているとお聞きしていますが、一緒に作業されてのご感想は？

農協に頼まれて毎日、作業をしておりますが、早 3 年になります。飲み込みの早い人は大分作業を覚えてくれましたが、毎日、みみの里の指導者（責任者）の一人と一緒にしてくれます。けれども「みみの里」の方は話せない、言葉ができないので、手話でしか伝達ができません。私が指導員に言ってからでないと「みみの里」の方は実行にうつせません。「みみの里」の方が 1 日でも早く仕事に慣れることを願っています。このように「みみの里」に協力できて、達者でお願いしていることを非常に喜んでおります。また、一人盲人の人が来ましたが、この人は小さい頃から百姓をやっておられたそうで、草にも作物にもなれており、目が見えなくても長年の「慣れ」というか「癖」というか、見えなくても手慣れたもので、簡単な仕事はやってくれます。「慣れ」と言うことはとても大切だとつくづく感じました。

### 6. 最後に、A さんの健康に対する秘訣や日常気をつけておられることがありましたらお知らせください。

別に秘訣はありませんが、昔から良くいわれる事で、「早寝早起き病知らず」「腹八分医者いらず」、「歯は 32 本あるから 32 回噛むこと」、「無理はしないこと」、「心は丸く、気は長く、腹は立てず横に」等を大切にしています。また、「皆身体に植えてある根気の木が枯れかけたら何糞という肥料をやる」。この肥料は農協にはなく、商店にも売っていないが、非常によくきく肥料です。これらの言い伝えを参考にして毎日の暮らしをしています。昔の人は、良いことばかり聞いています。なるべく実行に移しています。

註 1：2013 年 6 月、A さんから速野学区の社会福祉協議会の会報に掲載したいと言われたので協力して欲しいと連絡があった。A さんは 7 項目の質問について、手書きの文章を郵送してくれた。その文章を直した後、A さんと会って一字一句を確認しながら校正していった。

註 2：在所（開発集落）にしか菜蒔盆はない。夏がすんで冬のダイコンやカブラなどの菜（野菜）の種を 9 月初旬に蒔いてから、一休みしてくつろぐために祭りに行ったので菜蒔盆という（A 氏）。

註 3：祭りは祭りだが、神輿も祭らしいものは何もないので、「寝ていた方がええわ」といって体を休めていた（A 氏）。

註 4：正式名称は、社会福祉法人滋賀県聴覚障害者福祉協会びわこみみの里

## 催しのご案内

■ 京大生生存基盤科学研究ユニット・東南アジア研究所  
 京滋 FS 事業 第 54 回 実践型地域研究 定例研究会  
 日時 2013 年 3 月 21 日 (水) 17:40 ~ 19:00  
 場所 「もやいネット交流空間」  
 守山駅前コスモ守山 5 番館  
 守山市勝部 1 丁目 16 - 27  
 発表者 黒田末寿 (滋賀県立大学)  
 内容 「地域研究と暮らしをふり返るー明日への展望ー」

この 3 月末で、朽木 FS のメンバーである黒田末寿さんが滋賀県立大学を退職されます。今後もメンバーとして継続して関わっていただきますが、この区切りの時に、これまでのご自身の地域研究を振り返ってもらい、今後の展望を語っていただきます。

★以上の催し物への参加ご希望の方は、必ずご連絡ください。部屋のスペースと懇親会の準備があります。  
 京都大学 東南アジア研究所 実践型地域研究推進室  
 担当: 安藤和雄 (ando@cseas.kyoto-u.ac.jp) まで。

## スダ人のローカル・ノレッジで森や水を回復する 総合地球環境学研究所 アミ・アミナ・ムティア

急速な近代化や、近代化思想にもとづく農業開発や都市開発は、伝統的な価値を無視することが多い。現在のインドネシアの人々は、伝統的な水の循環を忘れてきているかのようである。

伝統的な水循環の方式は、水だけではなく環境を守るローカル・ノレッジとして先祖から伝えられてきた。ローカル・ノレッジ、すなわち、地域の知恵には、長い時を経て洗練された価値観が埋め込まれており、社会のメンバーを賢明にする知恵に満ちている。

西ジャワに住むスダ人は、独自の伝統的な方法で環境を守ってきた。

### スダ人の伝統的な環境の守り方

スダ人は、神様-自然-人間の関係をこう表現する。

“Tilu sapatulu, dua sakarupa, hiji eta-eta keneh (三は同じ顔 [自然と人間と神様は同じ顔]、二は類似し [自然と人

間は構造的に似ている]、一まだ同じもの [自然、人間、神様はただ一つ])”

環境はマクロコスモスであり人間はマイクロコスモスである。山(環境)は人間と同じ構造であると考えられ、人間の毛は山の森に値すると考えられた。川の流れは、人間の身体の右と左を分ける中間線として認識され、立ち入り禁止の森林は、人体の毛皮と骨がある領域とされている。(図1)。

### 教えを説く古い言葉

自然への愛を表した数々の古くから伝わる言葉がある。  
 “Suci Ing Pamrih Rancage Gawe” (我々は地球に住んでいるのではなく、地球と一緒に住んでいる)

“Leuweung ruksak, cai beak, ra'yat balangsak” (森が破壊されれば、水がなくなり、住民は大弱り。)

“Leuweung kaian, gawir awian, legok balongan” (森には木を植え、崖には竹を植え、溝は池にする)

これらは古くからことわざとして言い伝えられ、住民に自然に適合する生き方を浸透させてきた。

### 森や水の回復方法

森の回復によって水不足や洪水問題が解決できるとされている。ローカル・ノレッジは、道徳的なアプローチをとり、祖先から継承されてきている。さらにこの知識は、科学的な方策に読み替えることができ、また政府の政策に適合させることで森林を回復させる手掛かりになる。住民たちの伝統的土地利用法に基づき、環境保全の要素を組み込んで現在の土地利用計画を見直すことができる。民間に浸透してきた知恵だからこそ、住民が主体となり、政府やNPOはサポートに徹することが必要だ。これからも、ローカルな知恵をさらに収集し、最新技術で解釈翻訳し、様々な地域の知恵との交流が図られるべきである。これらの努力は、森の回復や地域社会の発展につながる。

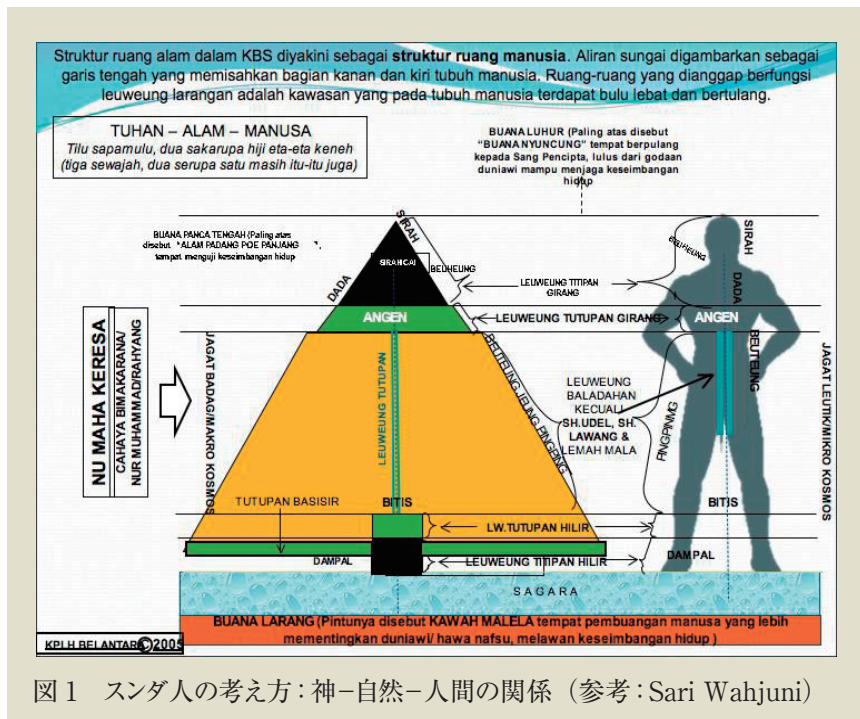


図1 スダ人の考え方: 神-自然-人間の関係 (参考: Sari Wahjuni)